

令和7年度 福井特別支援学校 学校評価書

項目	具体的取組	成果と課題	改善策・向上策
まなぶ 教育課程	教員が協働して各教育課程の年間指導計画や単元計画などの立案や授業づくりを行う。	92%の教員が学習指導要領に基づき、子どもの学びの連続性を確保するために教員間で協議を行い、年間指導計画を立案することができた。また、その成果として、92%の教員が学部間の学びのつながりを意識することができた。併せて、100%の保護者から授業参観や日頃の授業の様子を通して、子どもの特性に合わせた教材の工夫や授業の展開がされていたと評価を受けた。しかし、教員が自信を持って、子どもの学びがつながるように年間指導計画を立案することが「とてもできた」と回答している割合は半数に満たなかった。	今年度は、教育課程検討会と校内研究会を連携させ、教育課程別のグループで小・中・高の縦のつながりを意識した研究を進めた。しかし、子どもの学びの連続性を確保するために年間指導計画を立案することが「とてもできた」と回答した割合が伸びなかった要因として、取組初年度は単元シートの作成に重点を置いたものの、小中高の縦のつながりへの意識が教員間で十分に浸透しなかったことが挙げられる。今後は、検討会と研究会の連携をさらに密にし、縦のつながりを意識しながら、学習指導要領に基づいた年間指導計画の立案と単元シートの作成を目指し、研修や研究に取り組んでいきたい。
かかわる 学習支援	授業や行事で他クラスや他学部の児童生徒と時間を共有したり一緒に活動したりする機会を増やす。	100%の教職員が、授業や学校行事等を通して、他クラスや他学部の児童生徒同士が関わり合う機会を設定することができた。その成果として、100%の教職員が、集団活動を通して、他クラスや他学部の児童生徒同士が関わり、ふれ合ったり協力し合ったりすることができたと感じている。87%の児童生徒も、授業や学校行事、「スマイルジャンプタイム」などを通して、他クラスや他学部の友達と一緒に活動したり話をしたりすることができたと回答している。	児童生徒同士の関わりを重視する意識の向上が見られる。今年度は「スマイルジャンプタイム」等の特別活動だけでなく、授業や学校行事等においても、他クラスや他学部と一緒に活動する機会を多く設定することができた。今後は活動の中で、児童生徒同士が互いに積極的に関わり合えるように仲介するなど、教職員の働きかけも工夫していけるとよい。
いきる 生活・進路支援	「進路と生活の情報BOOK」を活用して、各学部で大切にしたいことを児童生徒や保護者と共有する。	84%の教員が保護者懇談会等で、「進路と生活の情報BOOK」を活用して、本人や保護者と将来の生活について、一緒に考える機会を持つことができた。89%の教職員が児童生徒の将来の生活について考えることができた。同様の質問に、とても実感できた・実感できたと回答した保護者は66%だった。特に、小学部の保護者の満足度が低かった。小学部では、まだ進路についてイメージすることが難しいと思うが、現在の生活支援が、将来の進路支援につながることをその都度伝えていきたい。また、児童生徒の実態が多様化する中で、全体に向けた進路指導のみでは対応が難しく、多岐に渡る情報提供や個別の進路相談が必要であると考えられる。懇談等を利用して、個々に合わせて将来の生活を考える意識を高めていけるとよい。	保護者が将来の生活について考えることができるよう、「進路と生活の情報BOOK」の利用啓発、事業所見学や学習会への参加呼びかけ、進路だよりや生活支援情報誌の発行等、将来の生活について考える機会を引き続き発信していきたい。また、個々に応じたニーズに対応できるよう進路希望調査を活用したり、進路指導担当と担任とが連携したりし、進路相談の機会を充実させていきたい。児童生徒の将来の生活について、それぞれの学部や進路希望に合わせて、教員がキャリア教育の視点を持った指導を行うことができる手立てを講じていく。
くらす 生徒支援	実際の災害や事案を想定した訓練で、学校の危機管理体制や教職員間の連携について理解し、自分で考え行動する。	97%の教職員が災害や事案を想定した訓練に対し、自分の役割を理解したうえで取り組むことができた。災害に対しては、年2回の避難訓練だけでなくショート訓練を実施することで、教職員の災害に対する準備や心構えは高まっていると言える。一方で、様々な状況に応じて臨機応変に対応できたかという点においては、あまりできなかったとする回答があった。その理由として、今年度は実践的な訓練として、「携帯電話がつかない」状況での訓練を実施したことが考えられる。危機管理マニュアルにない状況での訓練を通して、様々な状況において臨機応変に行動することの難しさが課題として残った。	定期的な訓練を行うことで教職員の災害や防犯に対する意識は高い状況にあると言える。一方で、訓練時に初動班員として参集する教職員が固定化しがちな現状がある。すべての教職員が第一発見者や初動班員としての役割を経験することで、実際に災害が起きたときに、臨機応変に対応したり教職員同士が連携したりできると考える。来年度は、予告ありの避難訓練において、教職員が順番に初動班員を経験できるように工夫したい。
	健康観察や給食指導等、健康や食に関する取組を通して、健康的な生活に関心を持つとともに意識の向上を図る。	健康や食に関する取り組みの結果、約94%の教職員が児童生徒に対し、自身の健康に関する適切な言葉かけや支援を行うことができ、心身の不調の予防にもつなげることができた。また、90%以上の児童生徒が心身の不調に気付くなど、自らの健康と食について少しでも考えることができた。タブレット入力による健康観察が習慣化したことや、食事に関する校内放送の頻度が増えたことにより、学校全体として健康や食に対する意識が向上していると考えられる。	教職員においては、各種感染症対策を中心に、給食による栄養摂取等、引き続き、児童生徒の健康管理の徹底を促していきたい。また、タブレット入力によって児童生徒の健康への意識が低下しないよう、クラス担任等がより丁寧な声かけや支援を行うことで、児童生徒が自らの生活改善にまで意識を向けられるようにしていきたい。
学校づくり 学校管理・運営	学び合い高め合い、ケアし合う組織としての学校づくりを進める。	95%の教職員が、傾聴や対話を通して学び合い支え合うチームづくりに参画し、さらに92%の教職員が自分と異なる意見や視点を知ることで視野が広がり、チーム全体の成長に関与できたという結果となった。教職員全体の満足度も高かったと考える。教科指導に悩む教員が一定数居ることから、今年度は、教科会の開催を計画的に実施することができた。	教職員一人一人が、学び合い支え合うチームづくりの一員として貢献していることに自信をもち、引き続き定例の会議や授業担当者会、教科会等において、ねらいの焦点化や内容の精査を心がけ、話し合いの質を向上させていきたい。個々の発達段階や障がい特性に配慮した教科指導のあり方について、教科会内や教科会間での学び合いも今後期待したい。
	学び合い高め合い、ケアし合う組織としての学校づくりを進める。(DX推進)	95%以上の教職員が新校務支援システムや生成AIに関する研修や動画視聴をしたり、ICT支援員や情報担当者に質問をしたりしながら、授業や業務改善に向けたスキルアップに少しでも取り組むことができた。また、スキルアップに取り組んだ内容を日々の授業や業務改善に取り入れることができた教職員は、98%以上に及んだ。新しい校務支援システムや生成AIに対する教職員の高い関心と、業務改善に活かそうとする意識の表われだと考えられる。	ICTの活用や生成AIには高い関心はあるものの、実際に研修会に参加したり、動画視聴したりした教職員は少なく、今後はより教職員のニーズに応じた校内研修の企画や様々な外部機関の研修会の広報など進めながら、教育DXの推進を図っていきたい。